私の学生時代

残っていた学籍

藤本　博

生来、太陽が好きで室内でじっとしていられない性格である。これがわざわいしたのか、勉学はいささかおろそか気味だったが、どこかに入学しないと親に申しわけないという気持があって、同志社予科をうけることにきめた。昭和十八年三月である。

ご立腹になる方もあるといけないのであらかじめお赦しをねがっておくが、当時、同志社に対する私のイメージは「よく遊び、よく遊ぶ学校」ということで、私にぴったり?と思ったのである。したがって試験発表の日、先輩からすでにもらっていた予科の丸帽をかぶってみにいった。当然パスするという不遜なる気持のあらわれである。

すでに大東亜戦は激しく「自由と愛」の学園はそこにはなかった。予科の丸帽はハイカラだからかぶるなという指示がでた。帽子をかえてどこに意義があるのかサッパリわからんがともかく反抗した。生徒監室によばれて先輩からうけついだ四代目の丸帽をやぶった。がまたひそかに注文して学外でかむるという始末。とかく叱言をくうし、どうも勉強の方はみにつかなかったが、学内で一つだけ私の興味をひくものがあった。それは東洋の古典的武技をおさめる空手道部である。ともすれば危険、野蛮視され、学校当局の理解はおろか、後援はまことにびびたるものであったが、きびしく、しかもよき先輩にしたがい、がぜん張り切りだした。

＊

一年生をかくしてどうにかやってのけたが、二年目はまさに嵐である。戦まさに風雲をきわめ予科生も学徒動員令で大阪は住吉区帝塚山にあるアパートに合宿、名村造船所がよいとなった。八月になってわれわれ仲間にはじめての現役入隊通知がとどけられた。現松竹の監督武羅源太郎君である。故郷岡山へ一人で旅立つとあって寮のへいをのりこえて京都駅に見送りにいったが、帰寮点呼におくれ、あまつさえ頭の下げ方が悪いと即時退校、帰宅を命ぜられた。まさに小説的だが翌朝、私にも通知がきた。九月一日中部第二十二部隊に入隊すべしとのことである。八月三十一日まで予科長のところにあやまりにいったが、ゆるされない。ままよと入隊したら歩兵砲中隊に配属され大砲と馬の毎日がはじまった。空手道部の練習も相当なものだったが、幹部候補生の訓練はこれの倍増しだった。二人が逃亡、三人が今でいうノイローゼで気がふれそのうち二人まで死亡した。とかくするうちに、なんとか部隊一番で福知山予備士官学校に入った。西日本各部隊からの候補生とあいまして学課、実技をきそったが、私たち六人の二十二部隊歩兵砲グループは常に先頭をきっていた。あの原隊の猛訓練のおかげである。そしてこの激しい訓練からえた自信は私のそれからの人生に大いにプラスした。泣きごというまに人の倍やればいいんだという結論である。さて見習士官になって原隊に復帰するのもまじかというときに終戦、腹を切るべしとか処刑になるとか、さまざまなデマがとんでるうちに九月一日、堂々?　はんど

うと外食だけをもって復員した。玄関を入るなり開口一番、「日本がまけてまことに残念だったね」と母がいったとき、さすがの私もおどろいた。よろこんでくれると思ったのにはじめにこの言葉である。たいしたおふくろだ。いまだに位まけしてしまうのもこのときからだろうか。

さて、おそるおそる学校にでかけた。国破れて京都あり、昔とかわらぬ優雅なたたずまい、同志社はみどりの樹々にかこまれ、赤煉瓦のチャペル、校舎が目にしみるようだった。アッタ、アッタ、小生の学籍がのこっている。退学になったと思ったのにありがたいことである。

＊

昭和二十一年四月より英文学部終戦第一期生として角帽で登校した。敗戦のいたでは国はもちろん、一般家庭、学生生活に大きな影響をあたえたが、校内は学生会館の雑すい以外は戦時中よりも更に伝統のアカデミックな雰意気が満ちあふれ心のやすらぎをおぼえ、よくぞ同志社に学んでよかったと感じたのである。クラスメートには戦死された方はなかったが、空手道部先輩にはその悲報があいついだ。だが私たちは運動場の片隅にあった道場で二人より、三人よりして練習をはじめた。

朝六時から二時間、正午から四時間、その間に沖縄の人々の教えをうけ、また勉強し、PXでアルバイトし、ときにはかつぎやもどきのこともやり、そして恋愛も、なかなかいそがしく苦しくもあったが候補生時代の演習よりましであり、新しい時代の青春もたのしかった。

二年目、剛柔流空手道六段師範の免許をうけ、空手部主将、そして応援団長をやることになった。今では関西六大学野球もポピュラーになり応援する学生も多くなったが、当時、あの広い球場で二、三十人の団員以外に誰もいないときが多かった。野球の応援だけでなく、すもう部のメンバーが足りないときは、副将で出場したり、挙闘部がたりないときは、ウエルター級で出場したり、こんなとき、他の大学応援団が敬意を表して応援してくれたり、楽しいおもい出に満ちている。

卒業論文は「新聞の自由」、英文学部はじまってのけたちがいのサブジェクトであり、かつ英文学部はじまっていらいの応援団長だからと、当時英文学部長の上野直蔵学長より皮肉くられて九月一日メデタク八人のクラスメートと卒業式にこぎつけた。私の名が一番さきによばれ、あわててロストラムに登壇、湯浅学長よりディプロウマを受けて握手。いならぶ諸兄は小生が一番であると思ったにちがいない?! 現に卒業後、おほめにあずかったことがあるが、あらためて白状申しあげねばならない。答は九分の九で、十人目の学友はもう一年、念には念をいれることになった。

いやいや入学した同志社、しかし今や私の最高の誇りは同志社の卒業生ということである。私を育て、私を社会に送りだしてくれた学校である。ありがたいことに卒業後もずっと運動部を通じ学校とコンタクトがある。私はいまでも一人、学園をあるくとき、校歌を、応援歌を口ずさむ。そして私は若さをとり戻し思いきり深呼吸する。

そして正門の石碑をも一度よむ。

「良心の全身に充満したる丈夫の起り来らん事を　新島襄」

よし！　何かしらんが力がわいてくる。頑張るぞ！

（校友・英文毎日編集部副部長）